垂水郷土芸能保存会

垂水の新春伝統行事

ごあいさつ

垂水区長
黒田　徹

このたび、区内の伝統的な行事・文化・芸能の保存・伝承を目的とした垂水郷土芸能保存会の活動におきまして、「垂水の新春伝統行事」が発刊されますことを大変うれしく思います。

垂水区では各地区において、1月から2月にかけて、新しい年の無事と豊穣を願い、それぞれの地区ならではの行事が披露され、垂水の新春を飾る風物詩となっています。

本冊子では、垂水の新春伝統行事における現在の姿を捉えるとともに、各地区の関係者にお話しを伺うことで見えてきた、行事の変遷や歴史をお伝えできるものとなっています。興味深いことに、同じ「弓引き」、「追儺式」でも地区によって云われや、手順、作法などが異なります。かつて行事が始まる際に、基本的な型を基に、住民の考え方などが混ざり合うことで、地区それぞれの特徴ある様式が出来上がっていったのではないかと想像します。また、伝承を重ねるなかで変化してきたものもあるでしょうし、近年の少子高齢化など社会情勢の動きに合わせて、変化を余儀なくされたこともあるかと思います。全ての地区に共通して聞かれたのが後継者の問題で、行事の担い手が不足しているということでした。本冊子を手に取った方が、新春伝統行事を知り、興味を持ってもらうことに繋がればと思います。

こうした各地区の特色ある行事を記録し、後世に継承する本冊子の発刊は、まことに意義深いことであり、垂水郷土芸能保存会の皆さんをはじめ、作成にあたって中心的な役割を果たしていただいた各地区の伝統行事に携わる皆さんのご尽力に改めて感謝申し上げます。

この「垂水の新春の伝統行事」を読まれた全ての方々が地区の歴史や伝統文化を再認識し、今まで以上に垂水への愛着と誇りを持っていただくことができるよう心から祈念いたします。

垂水郷土芸能保存会
会長　長谷川　幸夫

皆様方にはご清祥の毎日とお慶び申し上げます。このたび、垂水郷土芸能保存会において、垂水区において受け継がれてきた、新春伝統行事の保存と継承のため、各地区の行事の様子をまとめた冊子を作成することとなりました。

作成にあたっては、各地区の皆様からの資料のご提供や貴重なお話をお聞かせいただくなど、大変多くのご協力をいただきました。おかげさまで垂水郷土芸能保存会としての冊子の完成に至りました。

冊子の作成に関係された皆様方のご協力に深く感謝申し上げます。本冊子が今後、垂水区の新春伝統行事の継承に役立つことを願い、ごあいさつとさせていただきます。

目次

ごあいさつ……1
開催場所……3
転法輪寺 追儺式……5
明王寺 追儺式……7
多聞寺 追儺式……9
奥畑大歳神社 弓引き神事……11
東名奥津神社 弓引き神事……13
西名春日神社 弓引き神事……15
ご協力者・参考文献……17

垂水の新春伝統行事　開催場所

垂水区では、新年を迎えた1月と2月に、厄除けや五穀豊穣などを願って追儺式（鬼追い）と弓引き神事が行われる。これらの新春伝統行事は、地区に暮らす人が鬼や神へと成り変わって実施されており、古くからの伝統を今に受け継いでいる。本地図には各行事が開催されているお寺や神社の場所を記している。

転法輪寺

明王寺

多聞寺

奥畑大歳神社

東名奥津神社

西名春日神社

転法輪寺 追儺式

太郎鬼の走り

子鬼の踊り

こつき

太郎鬼、次郎鬼、ババ鬼の踊り

太郎鬼と次郎鬼の踊り

ハナを参拝客に投げる

悠久の時を超えて 鬼が躍動

垂水区で最も古い寺とされ、神戸市登録無形文化財に登録されている転法輪寺。1月7日の午後2時、本堂に住職や地域の人々が座り、般若心経に合わせて杖で床を突く「小突(こつき)」をした後、まず子鬼4匹が消防団員に担がれて現れ、樫の棒を床に打ち付けて踊る。次いで太郎鬼が松明を持って、「走り」と呼ばれる単独の踊りを行う。その後、椎の木を造花で飾ったハナを参拝客に投げると、人々は枝を折り取って持ち帰り、家でお守りとして祀る。

子鬼の踊り、太郎鬼、次郎鬼、ババ鬼の踊りが、交互に繰り返され、最初の「走り」を半回と数えて7回半すると、太郎鬼、次郎鬼、ババ鬼それぞれが手にする木製の斧、槌、槍で鏡餅を突く「餅割」をし、参拝者への餅まきで式は閉じる。

一つ一つに心をこめて 準備が進む

準備は当日の朝から始まる。地域の人々が集まり、本堂での修法の準備や床の養生、衣装に使う藤蔓の用意、餅やお菓子のお供えなどを行う。ハナは椎の木に、色とりどりの造花をこよりで結んで作る。木は2本用意され、1本は参拝者に投げ、もう1本は式後に枝を折って「走り」で使った松明の残りと半紙でできた御朱印をはさんで結び、持ち帰って苗代のときに田んぼに突き刺して豊作を祈る。

鬼に訪れる時代の波

親鬼は厄年に近い男性が務める。中でも厄年に最も近い者がババ鬼となり、自らの厄除けを兼ねて踊る。近年は協議会の会員が減って鬼の成り手も少なくなり、消防団員が踊ることが多くなった。子鬼は小学4から6年生の男子がなかなか集まらず、協議会員の親戚からも集めるようになった。昔は練習なしで踊っていたが、現在は協議会の初集会後30分程度、よく知る人たちに教えてもらって練習している。短時間の練習で済むのは、鬼役が子どもの頃に追儺式を見て踊りを覚えているからだ。

地域一体となって 運営、保存へ

転法輪寺の追儺式はお寺が主催となり、中山協議会と地域の消防団員が実施を担っている。式の後には協議会役員婦人が中心となって、七草粥の炊き出しを行っている。その他の準備や運営においても女性の存在は不可欠だ。

近年、垂水区や神戸市のイベントに参加し、追儺式を披露する機会も増えた。協議会では新たに法被を作り、会場で役員や檀家が着用。伝統行事の保存に向けてPR活動も行っている。

転法輪寺
テンポウリンジ

〒655-0852
神戸市垂水区
名谷町 2089

鬼の面

餅まき

松明で照らし太郎鬼が槌で打つ「餅つき」

明王寺 追儺式

善鬼が舞い、災厄をはらう

年明け1月4日、垂水区の祭事の先陣を切るのが、神戸市の登録無形民俗文化財に指定されている明王寺の追儺式だ。

当日午後、本堂で『本尊大聖不動明王初護摩祈祷』の後、4匹の子鬼が世話役の肩に担がれて登場し、太鼓に合わせて飛び上がりながら樫の棒を床に打ち付けて踊る。親鬼は太郎鬼、次郎鬼、ババ鬼の3匹で、右手に松明と、左手にそれぞれ木製の槌、斧、槍を持って踊る。子鬼と親鬼の踊りが交互に繰り返された後、厄に見立てた鏡餅を太郎鬼が木槌で叩き、次郎鬼が斧で切り、ババ鬼が槍で突き落とす。踊りの後、親鬼と住職らは回廊から境内の参拝客に向けて鬼の花、餅、ミカン、福銭をまく。その後、檀家たちは、お札、色紙で作った花、松明の燃えかすを鬼の装束に使われていた藤蔓で括って持ち帰り、厄除けとして一年間祀る。

鬼の装束は念入りに、餅は大量に準備

準備は当日昼過ぎから滑協議会員で構成する保存会の人々によって行われる。「鬼部屋」といわれる鬼の支度部屋で、親鬼と子鬼に鬼衣を着せ、鬼綱を巻き、さらに藤蔓で独特な「鬼絡み」を施していく。餅まきには2000～3000個の餅が使われ、かつては1月3日に協議会長がその多くをつくことが習わしだった。

以前は本堂内陣で行われていた

1995年の阪神淡路大震災以前は、鬼の踊りは本堂の内陣で行われおり、薄暗い内陣を照らすのに松明が焚かれていた。本堂は木造で燃えやすく、消防団は水を張った桶を用意し、次々に燃え落ちる火の粉に箒で水を撒いてまわり、鬼の踊りが終わる頃には本堂の床は水浸しだった。震災後、本堂の建て替えに合わせて鬼の踊り場は外陣に設けられ、松明は燃え落ちにくい素材に変わり、当日に床を合板で養生することで、本堂は水に濡れることも、すすけることもなくなった。

時代に合わせて柔軟に変化

鬼は滑協議会会員で古くから滑地区に暮らす檀家から選ばれる。ババ鬼は厄年の男性が担当していたが、檀家人口の減少に伴い、できるだけ厄年に近い男性が担う形になった。子鬼は小学校高学年の男子から選ばれるが、分家の子どもや、低学年、さらには幼稚園児にまで枠を広げて集めている。

また、子鬼の杖やシャガマ、藁草履などは各家で祖父や父親が作っていたが、現在は保存会で用意している。所作や作法なども代々口伝されてきたもので、今となっては高齢者の中にも詳細まで正確に知る人はほとんどいない。保存会では滑の伝統を絶やすまいと、様々な資料等を基に正しい様式の再現に努めている。

明王寺
ミョウオウジ

〒655-0852
神戸市垂水区
名谷町1900

子鬼の踊り

子鬼の登場

本尊大聖不動明王初護摩祈祷

親鬼（ババ鬼、太郎鬼、次郎鬼）の踊り

太郎鬼と次郎鬼の踊り

太郎鬼の「走り」

鬼の面

供物配布

鏡餅

多聞寺 追儺式

鬼三匹が勇壮で 迫力ある踊りを披露

鬼の荒々しい踊りが特徴の多聞寺の追儺式。源平の合戦で、源義経が必勝祈願に訪れたとの言い伝えもある、ここ多聞寺の由緒ある新春行事である。

1月5日午後2時頃、住職らによる般若心経、観音経、多聞寺独特の初夜の導師作法が行われる。その後、法螺貝と太鼓、半鐘の音に合わせて最初に婆鬼が走り出て三方に盛られた塩を境内にまきその場を清める。次に、婆鬼、太郎鬼、次郎鬼の三匹鬼が次々登場し、伝統にのっとって鬼がそれぞれ木製の剣、鎚、斧を左手に持ち、右手で松明を激しく振り回しながら勢いよく舞台を駆け踊り、その後、紅白の小餅をまく。

鬼登場の合間では小鬼4匹が登場し、手にした棒をお互いに打ち交わして次の鬼の登場を待つ。

終盤、三匹鬼が踊りとともに小餅、鏡餅、福筒を参拝客に向けてまき、最後に華をまいてお開きとなる。

鬼の勇壮な踊りを 皆で支え繋ぐ

出番の多い鬼は会員たちが交代で踊る。鬼の登場は7回あり、延べ16匹が順番に面を付け替えて出ていく。こうして鬼の激しい踊りを最後まで続けることができる。

鬼のダイナミックな踊りを支えているのが、当日本堂に架設される踊り場。本堂の正面、回廊の外側に組まれる頑丈な舞台のおかげで、鬼の勇壮な姿を見ることができる。

伝統にこだわる 華、餅、福筒、松明

華は当日の朝、保存会の人々が僅かに自生する冬青(ソヨゴ…赤い実のなる木)を採りに行く。その後、採ってきた冬青の枝に紅白の紙の華を付けて約300本用意する。

餅は例年60キロ用意する。以前は暮れの30日についていたが、現在は業者から紅白の小餅を調達しており、鏡餅はお寺で準備されている。

副筒は竹の中にお守りを入れ、それを奉書で巻いたご利益のある巻物で、1年後に納めに来ると良い。

松明は苧殻(おがら…麻の皮をはぎ取った茎)を10本程度束ね紐で縛って作る。

次代に繋げるために

かつては境内に露店が出て、朝から祭りのように楽しめる時代もあった。鬼の踊りは細かな所作が決まっている。以前は年越し前の12月に集まって稽古をしていたが、現在は人が集まりにくいため、当日の稽古のみで本番に臨んでいる。

昔は青年団が行事の世話役を担っていたが、昭和35年頃に青年団が解散し消防団に引き継がれた。

現在は昭和53年に立ち上げた保存会が運営している。近年は広報紙に取り上げられていることもあり、年々見物客は増えている。

多聞寺
タモンジ

〒655-0007
神戸市垂水区
多聞台 2-2-75

次郎鬼、太郎鬼、婆鬼の踊り

鬼の踊り

塩まき

三方に福筒、鏡餅、小餅盛り

小餅まき

子鬼の踊り

鬼の面

華をつけたソヨゴ

華をまく

奥畑大歳神社 弓引き神事

奥畑大歳神社
オクハタオオトシジンジャ

〒655-0852
神戸市垂水区
名谷町字北ノ屋敷 3143

2張りの弓を交叉

小社から弓をとる

本殿に参る

小的を射る

子どもが弓を届ける

大的を射る

源義経ゆかりの歴史ある神事

奥畑地区、大歳神社では新年の行事として、1月の成人の日と2月の建国記念の日に、「百手武射神式」と呼ばれる弓引き神事が行われる。

平安時代の末期、源平合戦のさなか、源義経が平家追討の進軍の折、奥畑村を訪れたときのこと。一の谷攻撃を企てた義経は、1月8日に大歳神社に立ち寄り、必勝祈願に参った。見事に一の谷の合戦で勝利を収め、お礼参りに再び訪れると、200本の矢を100回に分けて射る百手武射神式を務めた。これがこの神事の由来とされており。1月のものを「ガンゴメ(願込め)」、2月のものを「ガンホドキ(願解き)」と呼んでいる。

「鬼」を狙って矢を射て厄を払う

弓引きは当日午後2時頃に二人の射手が宮司とともに本殿に参り、小社に供えてある弓と矢を取るところから始まる。年長者が南側、年少者が北側の畳に座り、一礼したあと、立ち上がって片肌を脱ぎ、年長者、年少者の順に矢を射る。射た矢は見物に来ている子どもたちが拾って宮司に届け、その矢を受け取ってさらに弓を引く。繰り返すこと6回、的の裏から鬼を表す藁を束ねたものを引っ張り出すと、射手に「鬼が見えましたか」と聞く。射手がそれぞれ「見えました」と答えた後に、もう一度矢を射た後、的を小さいものに替えて2回ずつ射る。

1月と2月、2度の弓引きはほぼ同じ手順で行われるが、矢を射た数の数え方(数トリ)が異なる。1月は射手の前に置いた芝に竹の串を刺して数え、2月は長さ30㎝ほどの太い竹に、鎌で回数を刻み付ける。

伝統に沿って準備が進む

当日は朝から世話役であるコヤドが大小の的を作り、神社境内の飾り付けやお供えの用意をする。大的は1辺約120㎝の正方形で、小的は直径約30㎝の円形と決まっており、的の黒い部分には茄子を焼いて作った墨を使う。

大的は本殿南広場の西側に立て、東には射手2人の弓引きの場となる畳を1枚ずつ敷く。また、小的2個と弓2張り、そして矢4本は本殿西に合祀されている社に供える。

少子化の中、守り伝えていくために

これら弓引きの手順や作法、所作は、地域の人々によって大切に受け継がれてきながら、時代の流れに合わせて変化もしている。

例えば、古来、射手は満16、7歳の長男に限られていたが、少子化の影響から小さな子供に当たることもあった。そこで、長男に限らず地区在住の14歳から18歳ぐらいまでの男子が務めるようになった。どうしても成り手がいなければお宮番が弓を引くこともある。

小的

大的

数トリ

東名奥津神社 弓引き神事

東名奥津神社
ヒガシミョウオキツジンシャ

655-0852
神戸市垂水区
名谷町社谷 1234

無病息災と五穀豊穣を願って

荒神社または海神社に対して小宮とも呼ばれる東名奥津神社。ここでは新年の神事として、住人の無病息災と五穀豊穣を願って弓引きが行われる。かつて開催日は1月12日と決まっていたが、現在は成人の日（1月第2月曜日）に、東名協議会によって執り行われる。

準備は前日、大小の的作りから

弓引きの準備が整えられるのは開催前日。午前中、東名協議会の新年初集会として伊勢講が行われ、その流れで午後から弓引きの当番が東名奥津神社へ行き、的作りなどに取り組む。大的は周辺で切り出した竹を127㎝に切り、8等分に割っても の21本を格子状に組み上げ、半紙を貼って墨で二重の円を描く。小的は薄く剥いだ竹で直径20㎝の輪を作り、その上に半紙を貼って同じく墨で二重の円を描く。カズトリは約20㎝に切った竹を細く割り、15本ほどを束ねて半紙を巻いて水引を掛けて作り、これを2本用意する。

射手は神様に成り代わる

その年の射手は、東名協議会集落の成人男性から決められた2人。それぞれ春日さん（春日神社）、八幡さん（八幡神社）と呼ばれ、神様として扱われる。当日朝、射手は入浴をして体を清め、袴・袴姿で戸主たちとともに神社に参り、海神社宮司より祝詞を賜りお祓いを受ける。その後、東名公会堂で直会を開き、正面に宮司、両脇に春日さんと八幡さん、さらにその両脇に添え役の2人が並び、大きな杯に注いだお神酒を順番にいただく。このとき卓上にごまめと柿なますが並び、食される。

古式ゆかしい作法と所作で矢を射る

同日12時過ぎ、神社から約120m東に坂を上がった弓引き場へ、大的と小的が運ばれる。まず、射手は足元に用意された切芝に射った矢を数える「カズトリ」と呼ばれる竹の棒を刺し、洗米を巻く。その後、弓をつがえ、大的へ向けて2本ずつ矢を放ち、3本目は矢をつがえるも射ることはなく「ヤア」という掛け声を上げるのみ。続いて直径20㎝ほどの小的への弓引きが行われる。

この地の歴史と心を伝えていくために

これら一連の作法や所作、衣装や道具について詳細に記された資料はなく、旧村の頃から地域に暮らす東名協議会集落の中で、口伝によって伝えられてきた。しかし、古くからの住民が数を減らすなか、時代に合わせて簡素化を図るなどして続けてきたが、少子高齢化や若者の地域離れが止まらないことに加えて、新型コロナウイルスの脅威もあり、何を残していくべきか見つめなおす時期に来ているとのことであった。

弓引き場へ的を移動

大的と小的

正面に宮司、両脇に春日さんと八幡さん、両脇に添え役

「カズトリ」

ごまめと柿なます

お神酒を順番にいただく

小的は縁起が良いとして地域の子供が持ち帰る

小的を射る

大的を射る

西名春日神社 弓引き神事

静かに、そして厳かに 神事が始まる

矢が放たれ、風切り音を上げて新年の寒風を貫き、「パンッ」という音とともに半紙に描かれた的の背後の畳に突き立つと、見物人から歓声と拍手が沸き起こる。毎年1月の成人の日、西名の春日神社境内で行われる弓引き神事の光景である。

当日の朝、10時過ぎからその年の当番である4人の射手が西名会館に集まり、羽織、袴といういで立ちとなって神社へと向かう。4人は社と的場で静かに参拝を済ませ、的の前に供えてある酒と肴をいただいた後、弓引きが始まる。

弓引きの後、射手は神様となる

弓は4人のうち年長者から順番に1人2本ずつ射る。最後の射手である最年長者の2本目は、矢をつがえて5分引きにするのみ。さらに小的に対しても同様の作法で弓が引かれる。

弓引きが終わると、見物に来ている人々によって自由に矢が射られる。射手4人は神様に成り変わり口の院、奥の院へと参拝する。道中、同行する人々に供物の餅やミカン、酒と洗い米を振舞う。口の院、奥の院に供えてあった鏡餅は当番が持ち帰り、薄く四角に切って近所の人に2枚ずつ配る。

的作り、そして当日の準備

神事の準備は近所の人たちが当日の朝から始める。的場に大的と小的、矢立てを配置し、鏡餅などのお供えを用意し、手洗い場を整える。的作りは毎年当番が決まっており、正月前に作っておく。大的は1m80cm四方の半紙に2重の円を墨で描いたもので、2枚の畳を立ててその前に貼りつけられる。かつては竹を組んで作っていたが、いつしか現在の形に変わった。小的は直径45cmの金属の輪に半紙を貼り、墨で円を描いて作る。

次代へと伝える「祭事運営手順書」

西名の弓引きは時代とともに変化している。古くは2月11日の建国記念日に開催されていたが、近年は参加者などの都合を考慮し、成人の日に行われるようになった。的場も場所を変えており、阪神高速道路湾岸線の下の谷合や、あじさい公園で行っていたこともあった。

古くは青年団が開催の中心を担い、現在は西名協議会がその役割を担っている。しかし、この地に古くから暮らす会員の高齢化や減少が進み、かつて80軒程あった家々は、現在は33軒まで減っている。このような中、代々伝えられてきた神事を確かに守っていくために、西名協議会では「祭事運営手順書」を作成し、隣保長に引き継いでいる。

西名春日神社
ニシミョウカスガジンジャ

〒655-0852
神戸市垂水区
名谷町字丸尾

的場での参拝

参拝

春日神社

見物人の弓引き

口の院、奥の院

大的を射る

小的を射る

西名会館での準備

大的、小的と供え物

ご協力者（敬称略）

●制作協力者

名谷町中山協議会の皆様
名谷町滑協議会の皆様
多聞財産区管理会の皆様
名谷町奥畑協議会の皆様
名谷町東名協議会の皆様
名谷町西名協議会の皆様

参考文献

神戸の民俗芸能　垂水編
名谷誌
多聞のあゆみ

垂水の盆踊り
- 垂水区の音頭 -
（令和元年8月発行）

垂水の秋の伝統行事
（平成30年10月発行）

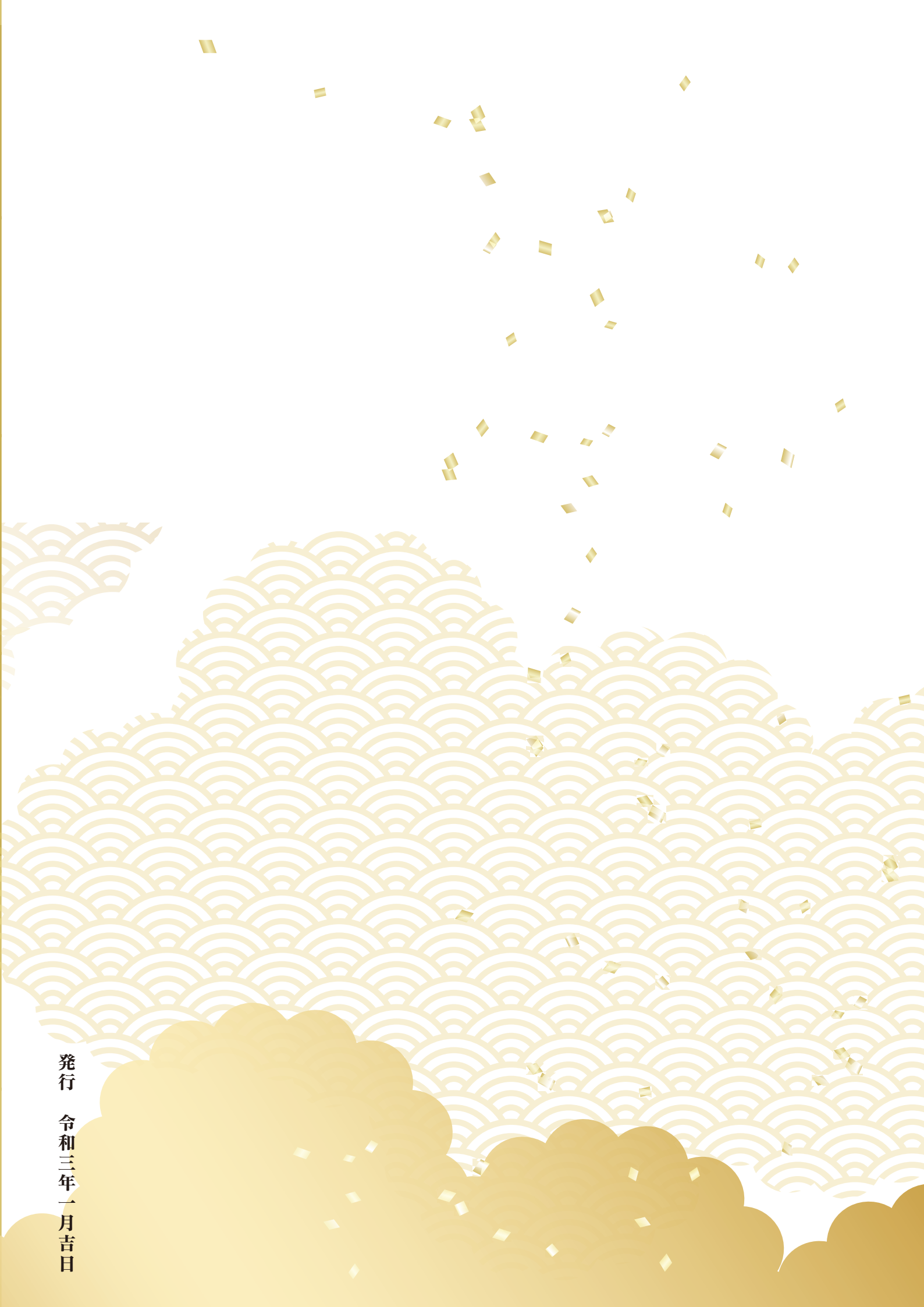
垂水の布団太鼓
（平成29年10月発行）

【編集・発行】
垂水郷土芸能保存会
令和3年1月吉日
神戸市広報印刷物登録　令和2年度第293号（広報印刷物企画 A-1類）

【おことわり】
記事の内容・年代・日付・場所などにつきましては、誤り・漏れのないようできるだけ確認しましたが、万一誤り・漏れなどがございましたらご容赦ください。
なお、令和３年の新春伝統行事に関しては、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、中止もしくは関係者による祈祷等のみの実施が予定されています。

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。

United Nations Educational, Scientific and Cultural Organization
City of Design KOBE
Member of the UNESCO Creative Cities Network since 2008



発行　令和三年一月吉日